

教科等研究会（小学校国語部会）

平成 28 年度 研究活動のまとめ

1 研究テーマ

国語科における言語活動の充実 ～付けたい力と手立てを明らかにして～

2 研究経過

第 1 回			第 2 回			第 3 回			第 4 回		
5/26	44 名	飯野小	7/11	益 城 中 央 小	模擬授業・講 話	11/2	甲佐小	研究発表 会参加	1/27	小坂小	岩永光央 (教諭)

3 研究の概要

(1) 研究の内容

① テーマ設定

本年度の郡教科等研究会全体テーマ「児童一人ひとりが輝く『分かる・楽しい』授業づくり」を受け、小学校国語部会では昨年度設定したテーマと同様「言語活動の充実」として研究を進めていくことにした。国語科においては言語活動を通して言語能力を身に付けることがねらいであり、言語活動を通して指導事項を指導するものである。つまり、言語活動が適切に位置付けられて初めて、その指導が成り立っていくのであって、本テーマである言語活動の充実を行うことは国語科の目標の実現に直結していると考ええる。

また、本テーマの研究を進める上で、身に付けるべき具体的な国語の能力と手立てについて授業研究会で検証していくために、「付けたい力と手立てを明らかにして」をサブテーマとして設定した。

② 基本方針

ア 講話・研究授業・授業研究会を中心に研究を進める。

イ 地区理事を本年度も 3 名ずつにする。事前研・授業研の運営等は各地区の理事が中心となって実施する。

ウ 研究授業では、授業者は学習指導案の他に研究授業の主張点を資料として付ける。

エ 授業研究会では、討議の柱を設け、討議の柱を中心に、実践を踏まえて意見交換をする。

③ テーマに迫る研究のあり方

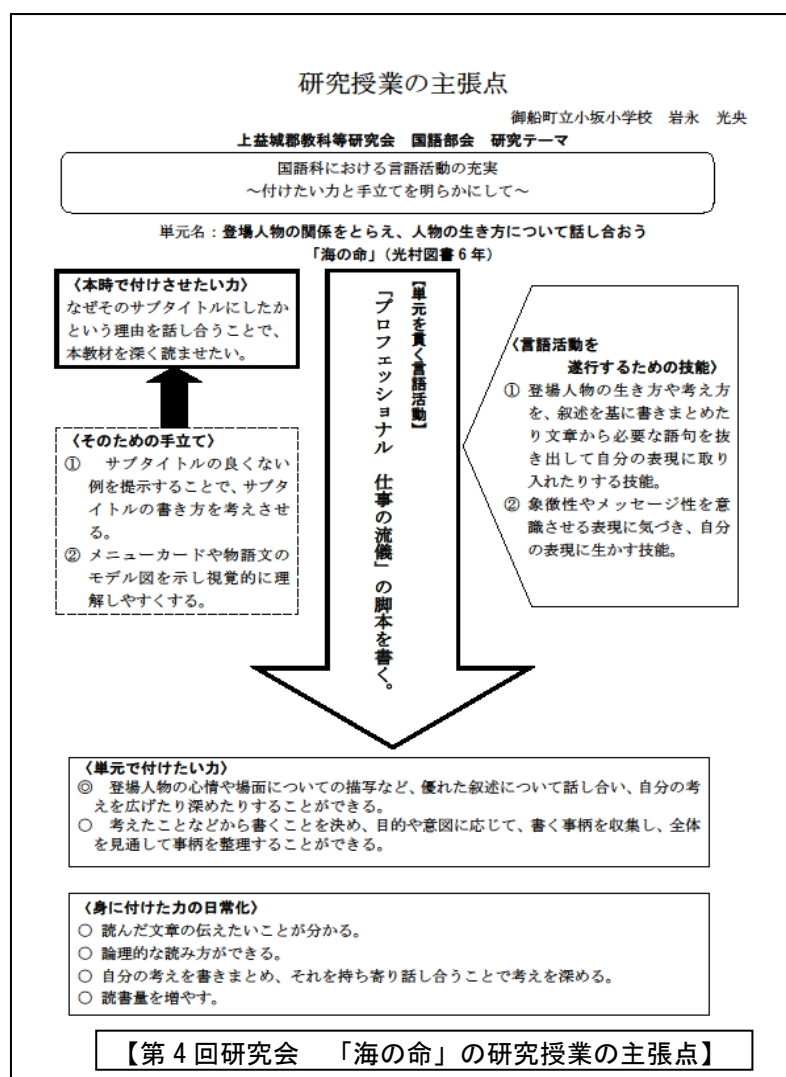
ア 「読むこと」授業のあり方について学ぶ

「説明的文章を読む授業」

「文学的文章を読む授業」について、就実大学教授「丹生裕一」先生の模擬授業と解説からこれからの授業のあり方について学んだ。

イ 単元を貫く言語活動の設定

国語科では、言語活動を通して指導事項を指導するため、1 単位時間の授業の中に殊更に言語活動を位置付けるということはしていない。一方で、国語科特有の単元を貫く言語活動を設定し、



単元全体を見通した指導を行うようにしている。研究授業で公開される言語活動は、その単元全体を貫く言語活動の一部であり、国語科では、言語活動が手段にも目的にもなり得るので、研究協議の大事な柱として取り扱ってきた。

ウ 研究授業の主張点

サブテーマに沿い、授業者が授業で付けたい力とその手立てを明確にするために「研究授業の主張点」を作成し、指導案とともに参加者に提示している。「研究授業の主張点」は、「単元で身に付けたい力」「本時で付けたい力」と「そのための手立て」の他「単元を貫く言語活動」「言語活動を遂行するための技能」さらに、「身に付けた力の日常化」の項目から成り、研究授業の開始前のオリエンテーションで参加者に説明し、参観の視点を明らかにして参観できるようにした。

エ 討議の柱を中心にした意見交換

研究授業の参観及び研究会の視点の中心となるものとして「討議の柱」を設定した。限られた時間の中で研究を進めるためには、様々な研究の視点の中から本時の授業で明らかにされる部分に焦点を当てて討議を行う必要がある。事前研究会での協議をもとに「討議の柱」を決定し授業研究会を行った。

また、本時の授業における単元を貫く言語活動や手立てが、身に付けさせたい力を付けさせるために有効であったかについて、それぞれの実践を踏まえて意見交換を行った。以下が本年度の討議の柱である。

第4回授業研究会 小坂小学校 岩永 光央 先生

登場人物の関係をとらえ、人物の生き方について話し合おう「海の命」

(1) 討議の柱

「物語文の登場人物の生き方を、自分の生き方と重ねて読み深める力を付けるために、各学年においてどんな手立てを工夫すればよいか。」

(2) 単元を貫く言語活動

「プロフェッショナル 仕事の流儀」の番組脚本を作ろう

(2) 成果と課題

① 成果

- 第2回研究会の丹生先生による模擬授業では、45分の授業と解説、質疑・応答という流れで、文学的文章と説明的文章の2本を行った。会員が児童になり、実際にシートに書いたり、発言したりして、授業を受けるという形をとった。子どもになったつもりで授業を受けることで、発問や指示を精選することの大切さや、子どもが考えざるを得ないような仕掛けの工夫について考えることができた。この授業で付けたい力とはなんのか、子どもが「付けたい力が身についた」と実感させるにはどんな手立てがいるのかなど、日常の授業を客観的に考えることができた。
- 今年度も、「国語の授業で学習したことが、日常化につながっていない」という課題をふまえて、主張点の中に「身に付けた力の日常化」という項目を設けた。国語で身に付けた力をどのような場面で活用していくのかを意識した授業づくりを行い、指導計画や手だてが有効であったかどうかについて意見交換ができた。
- 討議の柱を中心に意見交換をしたことで、討議がそれたり広がりすぎたりすることなく、意見交換をすることができ、深めることができた。
- 昨年度から教科書が変わり、教材や取り扱い方も変わっている。第4回研究会では、「海の命」を教材として活用した授業を行った。これまで、東京書籍での「海のいのち」の授業実践の経験がある会員も多く、これまでの「身に付けさせたい力」とどう異なるのか、そのためにどんな構想や展開を行っていけばよいのか、また、身に付けさせたい力を付けるための言語活動とは、どのようなものか。ということについて議論ができた。
- 「海の命」は、6年生の最後の文学的文章ということで、小学校の国語の学習の「読みの集大成」となる。6年生で、「海の命」を自分の考えやこれまでの読書経験などと関連させて読み深める力を付けさせるために、それぞれの学年でどんな力を身に付けさせればよいのか、ということについて意見交換ができた。

② 課題

- ・ 会員一人一人が、授業力を向上させるために、授業を各地区の会員が意見を出し合いながら創り上げるよう計画した。結果的には授業者や授業者の学校の会員が主に関わることとなり、授業者への負担も大きくなってしまった。事前研の持ち方や期日の調整等を工夫し、より多くの会員で創り上げる授業にしていける必要がある。
- ・ 第 3 回の研究会は、各町での研修会等と重なり、調整も難しく、参加できない方が多かった。年間計画等を検討し全員が参加できるような計画をしていける必要がある。

4 実践事例

(1) 授業の概要

単元名：登場人物の関係をとらえ、人物の生き方について話し合おう「海の命」

授業者：小坂小学校 岩永 光央 教諭

本単元は、太一の考え方や生き方を、登場人物の相互関係や場面の描写などの叙述と関係付けながら話し合い、豊かに想像することができることを目標としている。

① 単元について

「海の命」は、少年太一が父や与吉じいさ、クエとの関わりの中で、漁師として人間として大きく成長していく物語である。太一の成長を通して、読み手は生きることや自然との関わり方、命について深く考えることができる。

本作品は、語り手が太一の視点に沿って語っている。だが、太一の心情については直接表現されていないところが多い。読み手は、叙述をもとにどのような心情の変化があったのかを想像しなければならない。海や「クエ」に関する情景描写は大変美しい。情景描写に使われている比喻や擬声語、色彩語、擬人化された表現、海に関する象徴的な表現などに着目することで、太一が体験している海の世界をより深く味わうことができると考える。

また、本作品は、主人公である太一が、父や与吉じいさの死を乗り越えて成長していく姿を読み取ることが出来る作品である。太一の心情の描写を読み取るとは、自分の生き方を見つめたり、考えたりすることにもつながる。

この作品を通してこれまでの 6 年間で培ってきた読みの力を発揮し、作品の設定や大きく変わる場面を捉えることができるようにしたい。そして、単元を貫く言語活動にとりくむことで児童の読みを深めることができると考える。

② 指導観

ア 指導にあたって

太一の生き方に着目させて読むことに読みの重点を置いている。そのためには、太一が漁師としてプロフェッショナルな考え方をとらえていける必要がある。そこで、NHKで放映されている「プロフェッショナル 仕事の流儀」という番組を参考にすることとした。同番組は、有名スポーツ選手やゲームクリエイター、小児科医など、その道の「プロ」を取材し、その人物が大切にしていることや言葉などをキーワードにして視聴者に示し、ナレーションの脚本によって構成されている。

このことを「海の命」に当てはめると、主人公の太一の生き方と重なる部分がある。そのため太一が大切にしていることや言葉をキーワードとして見つけることが「脚本を書く」という単元を貫く言語活動となっている。「プロフェッショナル 仕事の流儀」の番組脚本を作ろうという目的意識を持つことで、興味関心をもって学習に取り組めるようにする。また、立松和平の「いのちシリーズ」を並行読書することで、これからの読書をするきっかけにしていける。

イ 手立てを明らかにすること

本単元を通して、情景描写から登場人物の考えを想像できるようにするために、情景描写に気をつけて読み、叙述をもとに「山場」での太一の心情が大きく変化した一文を見つけられるようにする。本文から太一の心情変化の読解に必要な重要語句に注目させ、文章をピックアップし、黒板に提示する。全員で同じものを見て話し合い、日頃、重要語句を注意深く読めない児童にもしっかりと読めるようにしていきたい。

(2) 学習指導案

目標 太一の生き方のキーワードとなる言葉や事柄を抜き出して、脚本のサブタイトルを考え、話し合う。

時間	学習活動	発問 (◎) と指示 (○) 予想される児童の反応 (・) 指導上の留意点●	備考
5	1 この単元でつきたい力を確認し、前時までの学習を想起する。 2 めあてを提示し、本時の学習の見通しをもつ。	○「思い出しタイム」で、前時までの学習を振り返りましょう。 ・ 太一がクエに出会ったが、もりを打たなかった。 【めあて】 太一の生き方を考え、脚本にサブタイトルをつけよう。	メニューカード 学習計画表 物語文モデル図
4 10 8 9	3 サブタイトルを考える。 (1) 教師の考えてきたサブタイトルを見て、書き方について話し合う。 (2) 教科書からサブタイトルに使える文を選び線を引く。 (3) 脚本のサブタイトルを考えましょう。 (4) 自分が書いたサブタイトルをグループで発表し、アドバイスをし合う。 【言語活動】 (設定の意図) 太一の心情の変化の話し合いを通して、主体的に読み取るようにする。また、単元を貫く言語活動「プロフェッショナルの脚本」を書くことで、本時をまとめる。	◎先生の考えてきたサブタイトルはどうですか。 よくない例を提示し、よくない点を考えさせる。 例：イケメン太一の冒険 ◎文章から読み取れるぴったりのサブタイトルを考えよう。 ○教科書から「太一の生き方を端的に表すことができる言葉（キャッチフレーズ）」と「読み手を引きつける魅力的な言葉」を選び線を引きましょう。 ●サブタイトルをなかなか考えられない児童には、どんな場面に印象に残ったか、この物語全体にどのような感想を持ったかなどを机間指導しながら尋ねる。 ○サブタイトルを5つ書きましょう。 字数は30字以内で書きましょう。 ○グループで話し合いましょう。 ●グループの人の意見を聞いて良い所などは真似してもよいことを伝える。書きかえた所は青ペンで書き込む。 ○友達の見解を聞いて、自分のサブタイトルをより良いものにしよう。 【評価 (B)】 太一の成長や生き方とクエとの出会いをつなげて考え、サブタイトルを話し合っている。 (発言・話し合い・ノート)	短冊 ノート ホワイトボードマジック
5	4 学習のまとめをする。	●変容の大きかった子のサブタイトルを発表させる。 ○次時の確認	 【発表の様子】